

- 14 「三心料簡および御法語」同、四五―一頁。「信空上人伝説の詞」同、六七―二頁。「浄土宗大意」同、四七―三頁。
- 15 「逆修説法」同、二四―六頁。
- 16 『新浄土宗辞典』隆文館、一四七頁。『浄土宗大辞典』一卷、三三三頁。
- 17 坪井俊映「還愚痴と菩薩道」『法然仏教の研究』山喜房、二一―五頁。
- 18 但信鈔卷下 浄全九ノ一一―九頁。
- 19 一枚起請文梗概聞書中 浄全九ノ一九―六頁。
- 20 円光大師行状画図翼賛 卷二十一 浄全十六ノ三三―八頁。
- 21 探玄鈔卷上 浄全十二ノ六〇―三頁。
- 22 一枚起請文講説卷下 浄全九ノ二八―一―二八―九頁。
- 23 「十二問答」昭法全、六三―七頁。
- 24 「常に仰せられける御詞」同、四九―一頁。
- 25 「聖光房に示されける御詞」同、七五―三頁。
- 26 「聖光房との問答」同、七三―八頁。
- 27 「一期物語」同、四四―五頁。
- 28 同右書、同、四四―六頁。
- 29 伝集第五卷、二三頁。昭法全、四八―六頁。
- 30 「一念義停止起請文」昭法全、八〇―六頁。
- 31 伝集第四卷、一一頁。
- 32 「念仏大意」昭法全、四〇―五頁。
- 33 「浄土宗略抄」同、五九―一―九二頁。「往生大要鈔」同、五〇頁。
- 34 「法性寺左京大夫の伯母なりける女房に遺はす御返事」同、五九―〇頁。
- 35 「聖光房に示されける御詞」同、四五―九、七五―一頁。

愚痴引用例の語法

- ① 人間乃至法然上人自身を中心としたもの。
- ② 本願にかかわるもの。
- ③ 浄土門にかかわるもの。

智慧のひかりもくもりて、生死の闇も照し難ければ、聖道の得道にも漏れたるわれらか為に施し給う他力と申候は、……⁽³⁴⁾

於ニ智慧、不レ得ニ断惑証果之正智、無漏之正智何因得レ発。若夫無ニ無漏之智劍ニ者、如何方、断ニ惡業煩惱繩ニ乎。⁽³⁵⁾

これらの文から、上人がいかに自己の無智なることに苦しまれたかが判る。聖道自力によって智慧をうるができない自己、智慧なき末法実存としての自己、こうした自己認識が、上人をして「われは無智の身」と云わしめたのではなからうか。そうだとすれば、無智ということは、悟りの智慧なきことを意味するものと考えられる。

三、小 結

以上愚痴無智について考察して来たのであるが、これを凡夫性との関係において見るに、これはまさに凡夫の実存認識を表明したものとえよう。すなわち凡夫とは仏教的知識のないもの、さらに仏教的知識があっても、悟りの智慧のないものを指しているものである。

愚痴無智という語は仏教一般では「愚かなもの」「知識のないもの」という意味に解されうるが、法然上人の用法においては、こうした基本的概念が根底にありながら、さらに、愚痴の例で見て来たように、悟りの智慧のないこと、知識に執われないこと、さらに仏

願に信順することの意味をも含んでいるのである。これは浄土宗の伝統の上から見ると、信機信法に通ずるものとさえ思える。すなわち自己の愚痴、無智の自覚は、同時に仏願を深く信ずることにつながることを示すものと考えられるからである。

以上のことから宗教的人間をめぐる語概念―ここでは愚痴無智―は単に字義的のみでなく、宗教的文脈、特にこの場合仏教的、浄土教的文脈の中で、さらに一宗教者の求道人生との関わりにおいて論じられなければならないことが判明して来たといえよう。

註

- 1 望月仏教大辞典。
- 2 Sir Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary*, Oxford University Press, p. 646.
- 3 高橋弘次『法然浄土教の諸問題』山喜房、十二頁。
- 4 同右書、十二、十三頁。
- 5 伝集、二三頁。『法然上人伝の成立史的研究』第一卷(三六頁)には諸伝の対照がなされている。
- 6 伝集、二五頁。
- 7 「十二箇条の問答」昭法全、六七四頁。
- 8 「聖光上人伝説の詞」同、四五八頁。「つねに仰せられる御詞」同、四九三頁参照。
- 9 「常に仰せられる御詞」同、四九〇頁。
- 10 「一念義について仰せられる御詞」同、八〇七頁。
- 11 「上人被下向配所事」同、七一五頁。
- 12 『選択集』同、三二〇頁。
- 13 「逆修説法」同、二九五頁。

るものである。これは主体的智恵ともいうべきものである。しかしこれは主観的知識ではない。なぜなら主観的知識は客観的知識と同様主—客二分の立場からの認識によるものであるからである。ここにいう主体的智恵とは自他不二の体認によるものである。しかし実際には智恵という言葉がここでいう知識をさしていることもしばしばある。しかし厳密な意味で仏教的認識論においてはその両者は區別されるのである。そして智恵は知識のより根源的な次元に位置するものである。

再び法然上人の用例にもどらう。②における無智の意は、黒白の知らざる童子の如く、是非も知らざる無智者というところからは知識のないものという意に解しうる。しかし法然上人をして自から無智者といわしめたとき、上人が真の意味で知識（仏智ではない）をもたぬものという意味を表明されているものであろうか。知識という点では上人はかなり勝れておられたことが知られる。語録には、「智恵第一」⁽²⁶⁾、「其智恵深遠事、言語道断」⁽²⁷⁾、「智恵甚深超過常人」⁽²⁸⁾など、上人の知恵の勝れていたことが伝えられている。勿論ここでいう智恵とは仏教的知識のことである。これを裏づける如き上人の熱心な学業研鑽ぶりが伝記には次の如く伝えられている。

上人かたりてのたまわく、われ聖教を見ざる日なし。木曾の冠者花洛に乱入のとき、ただ一日聖教を見ざり⁽²⁹⁾。

抑貧道山学の昔より、五十年の間広く諸宗の章疏を披閱して、叡

岳になき所をば是を他門に尋て必ず一見を遂ぐ。讚仰年積て聖教殆盡す⁽³⁰⁾。

上人黒谷に塾居ののちは、ひとえに名利をすて、一向に出要をもとむるこころ切なり。これによりていづれの道よりか、このたびたしかに、生死をはなるべきといふことをあきらめむために、一切経を披閱すること教遍にをよび、自他宗の章疏まなこにあてずといふことなし⁽³¹⁾。

これらのことから上人は仏教に関する知識がなかったわけではないことが想像される。しからば②の無智者とはいかなる意味であるか。思うにこれは一応一般的な意味で知識がないという如く解されるが、さらにこれを仏智という視点から見ると、いかに仏教の知識が豊かであってもそれは仏の智恵とはならず、それは童子の知識の如きものにすぎないという自覚を表現したものと考えられる。

①及び②の無智における智は、知識か仏智かはこれだけでは明らかでない。そこで上人の無智の自覚を伝える語録によってその意味を探ってみよう。

仏滅後第四の五百年ニタニ、智恵ヲ磨キ煩惱ヲ断スル事難ク……⁽³²⁾

しかるにこのころの我等は、智恵の眼しめて、行法の足折れたる輩也、聖道難行のけわしき路には、惣して望を断へじ⁽³³⁾。

○義山説

愚癡ニカエルトハ、迷深ク心暗カレトニハアラス。智恵ヲモ才覺ヲモ加ヘス。モノ立テス。只願力ニ身ヲ任スルヲ云ナリ。⁽²⁰⁾

○大玄説

還愚癡^{トハ}ニ信仏願^ニ之謂也。⁽²¹⁾

○法州説

法州は浄土門を還愚痴という場合と一枚起請文の「一文不知の愚鈍の身にして……」という場合は異なるという。前者は性得の煩愚であり後者は捨解還愚である。前者は仰信分で、愚痴ながら仏願を信じ「唯ほればれと念仏する人」であり、後者は解義分で、聖道浄土の教義等を能々学知しながらも、「少しも是を物だてず、愚痴になり還る」をいうのである。⁽²²⁾

かくの如く還愚痴に関しては諸解釈があるが、これを要約すると次の三つをあげることができよう。

- ① 迷える愚かものとなれという意ではない。
- ② 学解による知識には執われない。
- ③ 仏願に信順する。

また以上考察して来た愚痴という語の諸用例からその語義をあげると次の如くなる。

① 三毒煩惱の一としての無明煩惱。

② 悟りの智恵のない迷えるもの。(これは①と表裏一体をなすものと考えられる。なぜなら無明煩惱に覆れた存在であることによつて、悟りの智恵の発揮できない存在となるからである。)

③ 仏教的知識のない愚かなもの。

④ 仏教的知識に執われないもの。

かくの如く愚痴という語には、いくつかの語義があることが判るが、さらにその背後にある意義を追究して行くとき、そこには仏願に信順して生きている人間の姿が表現されているのである。

2 無智の身

① 自身の罪ノオモク無智ノ者ナレバ……⁽²³⁾

② 我烏帽子キヌ法然房也。黑白、不知童子如、是非不知無智者也。⁽²⁴⁾

③ 法然上人言、我是無智之身也。⁽²⁵⁾

無智とは智がないことであるが、この智には、知識という意と悟りの智恵(仏智)という意の二つが考えられる。この智恵と智恵との相異について簡単に解れると次の如くいえる。知識は普通一般的な方法で得られたもの、すなわち主—客二分の立場から主体が客体を認識することによつて得た、いわゆる客観的知識ともいべきものである。これに対して悟りの智恵、仏智とは無分別智といわれるもので、主—客未分のレベルで行われるもの、主客一如の認識によ

⑦ 若以^レ智慧^ヲ、為^ニ本願^ト者、愚痴無智^者、不^レ可^レ得^ニ往生^ヲ。⁽¹³⁾

⑧ 聖道門^ハ極^ニ智慧^ヲ離^ニ生死^ヲ、淨土門^ハ還^ニ愚痴^ト、生^ニ極樂^ニ。⁽¹⁴⁾

以上愚痴（癡）という言葉のある法語をいくつかあげたが、その用法は文脈的に見ても必ずしも明白ではない。以下順次考察してみよう。

① 罪業、智慧との関係において、説かれていることから察すれば、三毒の一、すなわち無明煩惱をさすものと解されよう。三毒の一としての愚痴は「逆修説法」に説かれている。そこでは清浄光によって貪欲の罪を、歡喜光によって瞋恚の罪を、智慧光によって愚痴の罪を滅することが説かれている。⁽¹⁵⁾

② 一文不通の安房の助との関係では知識なき愚かものという意にもとれるが、また悟りの智慧なきものともとれる。だとすればそれは三毒の一という意にもなる。

③ 法性寺の空阿弥随仏は經を習わず専ら念仏信仰に生きた人と伝えられる。⁽¹⁶⁾ その意味ではここでの愚痴も知識なきものの意と解されう。

④ 愚痴淺識という熟字からすれば、知識あさき愚かものと解されう。

⑤ 愚痴暗鈍という言葉からすれば、やはり知識なき愚かものと解されう。また本願との関係からもそっくりいう。

⑥ 初めに愚鈍下智とあり、後に愚痴とあることからすれば、知

識なきものという意に解されう。

⑦ ⑥と同趣の文（すなわち本願にかかわる文）である。そこから推察すれば愚者という意と解されう。

⑧ これは聖道門を智慧の道であるのに対し、淨土門を還愚痴の道をする文である。この還愚痴については、諸先徳の解釈があるので、それをたよりにこの意義を追究してみよう。

○坪井説

愚痴といっても六波羅密の一たる智慧波羅密によって対治される愚痴無知ではない。学解に対する自力の能力の限界を知って、学解を放棄して仏の教に信順することをいうのである。⁽¹⁷⁾

○隆長説

ぐちにかえれと云は、覺えたることをわすれよともならず。亦学問すべからずと云にもあらず。自の智慧才覚も物だてず。唯た願力に身を任するをいう也。⁽¹⁸⁾

○関通説

還愚痴とは、ぐちにかえると云う事なり。ぐちにかえると云えばとて、迷い深く心くらかれと云うにあらず。往生極樂の道は、仏願の致す所、仏智の致す所にして、三賢十聖、弗測所窺の境なれば、凡夫淺識の人の、心力学解のとどく処にあらざれば、智慧をも物立ず、才覚をも加えず、唯本願に打ち信せて、正直正路に、念仏を申す事、一文不通の者の如くなれとの意なり。⁽¹⁹⁾

きく経蔵にいり、かなしみく聖教にむかいて、手自ひらきみに、善導和尚の観經の疏の、一心専念弥陀名号、行住坐臥、不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼仏願故という文を見得てのち、我等がごとくの無智の身は偏にこの文をあおぎ、専らこのことわりをたのみて、念々不捨の称名を修して、決定往生の業因に備べし。⁶

これによれば、仏教の教行多しといえども、これは戒定慧の三学に集約される。しかしこの三学に照して自己を省察するに、戒行において一戒も保てず、禪定において一も得られないのが自己の真相である。そしてそこに上人は凡夫の典型的な姿を自覚されたのである。それは心乱れる凡夫、無漏の正智の得られない凡夫、無智のわが身としての自覚であった。

かくの如く法然上人の「凡夫性」自覚は、その背景に伝統的な聖道門的仏教があり、その真劔な学行実修を通じて顕われて来た主体的な自己認識であるといえよう。

さて凡夫としての自己認識を伝える言葉には、罪悪生死、煩惱具足、常没流転、乱想妄念、愚痴無智などがある。ここではこの中、愚痴無智について考察しよう。

二、愚痴無智の凡夫

1 愚痴の身

① 問て云わく、罪業重けれども、智慧の灯を以て煩惱の闇を払う事にて候なれば、加様の愚痴の身には、罪を作る事は重なれ

ども、つくのう事はなし、何を以て此の罪を消すべしとも覺えず候はまたいかん。

答て云く、只仏の御詞を信じて疑なければ、仏の御力にて往生する也。……智慧の眼有する物も、仏を念せざれば願力にかなわす、愚痴の闇深物も、念仏すれば願力に乗する也。⁷

② われらはこれ烏帽子もきざるおとこ也。十悪の法然房が念仏して往生せんといひていたる也。又愚痴の法然房が念仏して往生せんといふ也。安房の助という一文不通の陰陽師が申す念仏と、源空が念仏とまたくかわりめなしと。⁸

③ 源空は智徳をもて人を化する猶不足也。法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども、念仏の大先達として返て化導広し。我もし人身を受ば大愚痴の身を受、念仏動行の人たらんとこそ仰られれ。⁹

④ 弥陀の本願は極重最下の悪人を助け、愚痴浅識の諸機を救わんが為に……。¹⁰

⑤ 弥陀の本願は是愚痴暗鈍の輩、罪悪生死の類出離解脱の直路也。¹¹

⑥ 若以ニ智慧高才、而為ニ本願者、愚鈍下智者定絶ニ往生望ニ然智慧者、少、愚痴者、甚多。¹²

が国にいたる pithag-jana (puthujjana) を原語とする「凡夫」の意味内容は、それは第三者からする人間の呼称でなく、自己の宗教的自覚をともなつて生じる「自己の姿」として、すなわち主体的な自己の自覚内容となる。

法然上人の凡夫性認識は、勿論主体的自己認識の結果生じて来たものである。まずその消息を見てみよう。

一、凡夫性自覚の過程

『勅伝』第六卷には上人求道の消息を次の如く記している。

上人聖道諸宗の教門にあきらかなりしかば、法相三論の碩徳面々にその義解を感じ、天台花嚴の明匠一々にかの宏才をほむ。しかれどもなを出離の道にわずらいて、身心やすからず。順次解脱の要路をしらんとために、一切経を、ひらき見たまふこと五遍なり。一代の教跡につきて、つらく思惟し給に、かれもかたく、これもかたし。しかるに恵心の往生要集、もはら善導和尚の釈義をもて指南とせり。これにつきてひらき見給に、かの釈には乱想の凡夫、称名の行によりて順次に浄土に生ずべきむねを判じて、凡夫の出離をたやすくすめられたり。藏経披覽のたびにこれをかゞうといえども、とりわき見給こと三遍、ついに一心専念弥陀名号、行往坐臥、不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼仏願故の文にいたりて、末世の凡夫弥陀の名号を称せば、か

の仏の願に乗じて、たしかに往生をうべかりけりということわりをおもいさだめ給ぬ。

これによれば、上人が聖道門諸宗の教えによって、道を求められたが、それらによつても尚悟り得ず、出離の道にわづらいて身心安からざる状態であつた。それ故その後は自ら一切経を五回も読まれ思惟された結果、恵心の『往生要集』を通じて善導の釈を知り、「乱想の凡夫」の救われる道を発見されたのである。また同じく『勅伝』第六卷には次の如くも記されている。

或時上人おほせられていわく、出離の志ふかかりしあいだ、諸の教法を信じて、諸の行業を修す、おおよそ仏教おほしといえども、所詮戒定恵の三学をばすぎず。所謂小乗の戒定恵、大乘の戒定恵、顕教の戒定恵、密教の戒定恵也。しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたもたず、禪定において一もこれをえず、人師釈して尸羅清浄ならざれば三昧現前せずといへり。又凡夫の心は、物にしたがいてうつりやすし、たとえば猿猴の枝につたうかごとし、まことに散乱して動じやすく、一心しづまりがたし、無漏の正智なに、よりにてかおこらんや。若無漏の智劔なくばいかに、悪業煩惱のきづなをたゝんや。悪業煩惱のきづなをたゝずば、なんぞ生死繫縛の身を解脱することをえんや。かなしきかな／＼いかゞせん／＼。こゝに我等ごときはすでに戒定恵の三学の器にあらず、この三学のほかに、我心に相応する法門ありや、我身に堪たる修行やあると、よろづの智者にもとめ、諸の学者にとらうらしいしに、をしふるに人もなく、しめすに輩もなし。然間なげ

宗教的人間に関する語概念について

服部正穩

宗教的人間に関する言語表現はいろ／＼な形でなされる。大別すると積極的な形と消極的な形の二つをあげることができよう。積極的な形というのは、仏教的人間観でいえば、即身成仏といったような、人間に内具する仏性を積極的に表に出して表現しているものであり、消極的な形とは、罪悪深重といったような、仏性とは対照的な人間の罪悪性を表に出した表現である。仏教的伝統の中にこうした二つの類型を見ることが出来る。これを単に字義的にのみとらえようとすると、そこには矛盾が生じ、不条理なものが生ずる。それ故にわれわれはこれらの表現の本当の意味概念を慎重に検討し、正しく把握しなければならぬ。そのためには、語の単なる字義的意義だけではなく、広く各々がもつ文脈的、宗教的伝統を通じて、これを考察しなければならない。

いまここでは法然上人の人間観にかかわる語の研究に当り、まずその特徴を最もよく表わしている「凡夫性」ということについて考察することにする。

まず凡夫というのは一般仏教では「凡庸なる士夫、また四諦の理を見ざる凡庸淺識なる者」という意であり、またモニエルの『梵英

辞典』には、凡夫の原語である *prthag-jana* は a man of lower caste or character or profession, an ordinary professing Buddhist, blockhead, common people, the multitude とある。²⁾ これによれば凡夫とは下層階級の人、一般の仏教徒、愚かなもの、一般庶民という意味である。高橋弘次氏の研究によれば、この *prthag-jana* という語はもとは「独りひとり別べつに生れたもの」という単数の意味をもっていたものが、その意味が転化して「下層階級の人、一般庶民」という複数のものの意味をもつようになったようである。³⁾

また凡夫性認識において注意すべきことは、この認識が初めは人間一般を指すものであったが後には宗教的自覚を伴う自己の実存認識を伝えるものへと変って来た点である。高橋氏は次の如く示している。

インドにおける *prthag-jana* (*puthujana*) は、それが単数形においても複数形においても「独りひとり別つべつに生れたもの」から「愚かな一般の人びと」という意味まで、それは第三者からする人間に対する呼称であったといえる。しかし中国からわ